

スター誕生

源義経 (保元元年・1156～文治五年・1189)

NHKが行なったアンケート(「日本の歴史を動かした人物」)では、源義経はトップ10にも顔を出しませんが、大衆人気は抜群です。判官ほうがんびいき 鼻貞の言葉があるように、不遇の九郎判官に同情し、肩入れをする方も多く、一夜にして花開いた日本史上初のスターではないでしょうか。

軍記物(『平家物語』・『義経記』・『源平盛衰記』)や、編年史『吾妻鏡』、日記『玉葉』を通してイメージは増幅され、白面美貌の貴公子・戦闘の天才・悲運の武将などと、まことに多彩です。

中には、奥州で自害したのは偽物で、本物はモンゴルに渡って成吉思汗チンギスカンに変身したという逸話もあります。一方、史実に現われる義経は、すべてが腹違いの12歳年上の兄・頼朝との関連です。ついでながら、上記のアンケートによると頼朝は第七位にランクされています。

牛対鬼

義経が弁慶と出会ったのは、陰暦6月17日の夜で、五条大橋の上となっています(『義経記』)。今の五条通は豊臣秀吉が都市改造を行って新たに設けたものなので、義経の時代だと現在の松原通が相当します。さて弁慶は、通行人から太刀を奪うこと999本、千本の太刀にあと1本と迫った時に、牛若丸(義経)と遭遇したわけです。因みに、弁慶の幼名は鬼若丸と称したので、「牛」と「鬼」との闘いであったと言えますね。

ところで、夜の町中を牛若丸はどこへ行こうとしていたのでしょうか? 『義経記』によれば、五条天神社で弁慶が祈願していた横を、牛若丸が笛を奏でて通り、立派な太刀を持っていたので弁慶が狙いをつけたわけです。牛若丸は五条通を東へ向ったようですが、五条通の行きつく先は清水寺なので、そこで何かの祈願をするつもりだったのではないのでしょうか? しかもこの寺は母常盤につながる縁の場所です。常盤が幼子3人(今若・乙若・牛若)を連れて吉野へ逃れる途中、子の行く末を案じて祈願をしたのです。最も幼い牛若(1歳)は母の懐に抱かれていました。

そこでこの一件ですが、義経が弁慶を負かしたという話では終わらずに、祈願する姿勢を問うものかも知れません。即ち、弁慶の良からぬ願望は叶えられないが、義経の祈願——おそらく、源氏の再興＝平氏打倒に関係したもの——は、立派なことなので叶えて差上げましょう、とね。余談ながら、五条大橋での二人の遭遇は、明治44年(1911)発表の文部省唱歌「牛若丸」によって定着したと言われていて、それ以前は、清水寺境内とされていたのですよ。ただ、いずれにせよ『義経記』に記されたこの有名な話は、史実かどうかは不明とされています。

こうして弁慶は義経を主君として仕えることになりますが、存在感は主君以上とも言えます。『船弁慶』・『安宅』・『勸進帳』などの能楽では、義経を差し置いて堂々たる主役となっています。安宅関所を突破する際の弁慶の振舞い(白紙の勸進帳を読み上げ、主人の義経を打ちすえる)は、筋書きは分かっているのに涙を誘います。地元(石川県小松市)の安宅住吉神社は航海安全の神とされますが、この故事に因んで、「難関突破の守護神」として受験生らの人気を集めています。

それにしても義経の家来には真つ当な武将が少ないですね。随一の家来が僧侶くずれの弁慶、他には安宅関所を抜ける時に同行した山伏、この中の伊勢三郎などは伊勢の山賊あがりらしい。さらに、平氏を滅亡させる活躍をした時も、大半が頼朝からの借り物の家来という有り様です。嫡流の頼朝と比べて身分にも雲泥の差があり、家来の方こそ値踏みしたかも知れませんね。

武士は都から離れた東国——そこは草深い原野、野蛮で未開の土地、さらに陸奥^{みちのく}ともなると、人間ではない化け物が棲む所と思われていた——で台頭しました。そういう土地を自ら開墾して、農場主となったのが坂東武士の始まりで、半農半兵、つまり戦の無い時は農民そのものでした。「自分が開墾した土地は自分のもの」——この明瞭な執着心が「一所懸命」という言葉の本質です。

余談ながら、アメリカの開拓民の活動は西部劇で知られています。あれも荒野の開拓でした。そうすると、日本の武士の場合は、さしずめ東国開拓＝東部劇と呼べるのかも知れません。

義経の前半生

頼朝は開墾農場主連合のシンボリック的存在で、真の実力者は妻政子の家系である北条氏です。そのため、頼朝は政子に頭が上がらなかったとか。さて、頼朝は父義朝が平清盛との争い(平治の乱)で敗死したために、伊豆に配流の身でした。殺されなかったことも不思議ですが、源氏に心を許す武士が多い東国になぜ流したのでしょうか？ 勝者の慢心かと思いますが、平氏滅亡の誘因になりましたね。

一方の義経は、最初は仏門に入れられたものの、やがては復讐の念を燃やしながら鞍馬山での武術修行に明け暮れるという、牛若丸伝説が始まります。やがて、平氏の監視の目を潜りながら僻地を流浪し続け、忍従辛苦を重ねた末に、ついには奥州平泉の藤原氏に^{かくま}匿われることに。

ところで、義経の前半生の出来事、例えば鞍馬山での修行、武蔵坊弁慶との遭遇、諸国流浪、そして奥州平泉行きについては、鎌倉幕府の正史たる『吾妻鏡』には全く登場していません。その理由は、軍記物は義経の活躍を中心に描き、伝聞情報や脚色・誇張がつきものだからです。一方、『吾妻鏡』は鎌倉幕府(＝頼朝)の立場を評価するものなので、編集方針？が合いませんね。

義経が正史に現われる最初は、頼朝が平氏打倒のために挙兵をした時です。その時に義経は、遠く奥州から頼朝の陣中に駆け参じており、兄弟の涙ながらの再会が実現するという次第です。この時、義経は22歳。そしてこれ以降、義経の波乱万丈の後半生が始まるのです。

後白河法皇のご褒美

平氏を追い詰めた義経に対して、朝廷は賞賛し、官職を授けました。しかし、これが頼朝の不興を買い、兄弟の不仲が始まったとされます。

義経は法皇の謀略＝兄弟離間策に乗せられ、本当に“毒まんじゅう”を食べてしまったのでしょうか？

元暦元年 (1184)	朝廷、頼朝に対し平氏追討の宣旨を下す 義経が左衛門少尉・檢非違使に任官
元暦2年 (1185)	義経が壇ノ浦合戦で平氏を滅ぼす ⇒安徳天皇が入水、神剣は紛失となる 頼朝が家来に対し、朝廷からの授官を禁止 義経が東下するも頼朝には面会できず 頼朝、恩賞として与えた義経の所領を没収 義経が伊予守に任官……頼朝の推挙による

頼朝にすれば任官問題もさることながら、「義経殿は功をあせり過ぎ、大将の器でない」という身内からの批判も放置できません。本来なら、鎌倉に呼び戻して謹慎処分でも課す方が筋は通るのではないのでしょうか。にもかかわらず頼朝は、京都赴任を継続させた上に伊予守まで推挙し、一方で、これまでの恩賞地を没収しているのです。この処置は、義経を決して坂東武者としては認めずに、言うなれば“退役軍人”としての扱いをしたようなものです。どうやら、頼朝には何か別の理由や狙いがあったようですが、果してそれは何だったのでしょうか？

頼朝vs義経

その頃京都は世情が不安でした。養和元年(1181)に起きた飢饉を始め、地震・旱魃・洪水などの自然災害に襲われ、疫病が蔓延し、社会不安が盗賊横行を招きました。そういう時期に源平の争いが激化し、頼朝は治安と民情の両面で沈静化を図る必要に迫られたのです。平氏の残党が潜伏中との噂が絶えず、京をはじめ西日本全域に家来を配置し、警戒を怠りませんでした。一方で戦時状態から脱することが急務ではありました。従って、戦闘に長けた義経の存在は“諸刃の剣”とも呼べるもので、その勇猛果敢な性向は、頼朝の統治構想を台無しにする懸念があったと考えられます。

頼朝が義経を斥けた理由として、任官問題以上に重大なことがあり、それは安徳天皇を生け捕りできず、さらには神剣を紛失したことです。頼朝が固く命令したにも拘わらず、義経は大失態を犯していたのです。

頼朝は義経の排除を決断します。刺客派遣は失敗に終わりましたが、これは意図的な“誘い水”でした。というのも、刺客の報が義経に届くように日数をかけて京に到着させ、西国に居た家来は刺客が襲う頃には鎌倉へ戻るように指示しています。

つまり、義経が反撃できるように時間を与え、かつ故意に警備を薄くしたわけです。狙い通り、義経は朝廷に願い出て(実際には脅迫や恫喝)、頼朝追討の宣旨を迫っていますし、西国において叛乱の仲間集めを始めました。しかし呼応する者は少なく、もはや自暴自棄の心境でしたね。

- (注) 元暦2年8月に元暦から文治へと改元
- 文治元年 頼朝、土佐房昌俊らを刺客として京に派遣 (1185) 義経、刺客(83騎)を返り討ちにする 義経、朝廷に対し頼朝追討を願い出る
⇒朝廷は頼朝追討の宣旨を下す 義経が九州の地頭に任官 朝廷、頼朝に対し義経追討の宣旨を下す
 - 文治2年 義経の同盟者である源行家が討たれる
 - 文治3年 義経、密かに北陸道を下向し奥州へ向う 藤原秀衡、頼朝の義経引渡し要求を拒む 秀衡が死去
 - 文治4年 朝廷、義経追討の宣旨を再度下す
 - 文治5年 義経、泰衡に襲われ衣川の館で自刃 (1189) 義経の首級が酒に浸されて鎌倉に到着

しづのをだまき

文治2年(1186)4月8日 静御前、鶴岡八幡宮で舞う

よしの山みねのしら雪ふみ分けて 入りにし人のあとぞこひしき
しづやしづ しづのをだまきくり返し 昔を今になすよしもがな

吉野で捕らえられた静御前が頼朝や政子らの前で舞い謡った時、義経を慕う切々たる風情に、満座はしばし声も無かったようです。そしてこの時の頼朝と政子の二人の掛け合いが面白い。

頼朝：関東万歳とこそ謡うべきところを、叛逆人義経を慕う歌を謡うとはけしからぬ。

政子：義経多年の好情を忘れて恋い慕わないのは、貞女の姿ではない。

静の風情、まことに幽玄である。まげて賞美あるべきである。

政子が頼朝に、「あんたは、ほんまに女心の分からん、いやな男やね。」と言ったみたいです。政子にかかっては頼朝もかたなしですね。ところで、「をだまき」というのをご存知でしょうか。これは麻糸を玉のように巻いたものですが、糸を殻のように巻いて、中心は空にしたものです。幾重にも重なる思い出、しかし心の中は空ろである、ということを謡ったものかも知れません。一方、その頃の義経といえば、奥州平泉を頼りに必死の逃避行を続けていたわけです。